

シリアの歴史

大森 海太

巢ごもりのヒマつぶしに断捨離のまねごとで本の整理をしていると、『シリア』という名の古い文庫本が出てきた。奥付に一九九一年とあるから、三〇年近く眠っていたことになる。六〇年以上前にレバノン生まれのヒッティという先生が著したものの邦訳で、東西文明の十字路という副題があり、こんなことが書いてある。

この本で言う「シリア」とはシリア砂漠とそれに沿った肥沃な三日月地帯、今のシリア、レバノン、ヨルダン、イスラエルのあたりをさす。この地域には古来アラビアからシリアにかけて遊牧していたセム系の諸族が定住し、都市を築き王国を建て、興亡を繰り返した。

ここでシルクロードなどの産品を中継し、地中海交易に活躍したフェニキア人の文字がアルファベットとなり、またユダヤ教やキリスト教もこの地域で生まれるなど、シリアは後の西欧文明の発祥の地であった。

以降シリアはアレクサンドロス大王遠征によるヘレニズム国家に続き古代ローマ帝国の支配となったが、七世紀にはイスラム勢力が取って代わり、ダマスクスはウマイヤ朝の都として繁栄した。

十一世紀末、聖地奪還をめざす十字軍が進攻して地中海東岸にエルサレム王国などを築いたが、十二世紀末アイユーブ朝のサラディンに奪回され、十三世紀末には代わったマムルーク朝によって全面撤退を余儀なくされた。十字軍遠征を通じて西欧は東方の文化、科学技術など得るところが大きかったと言われる。

十六世紀以降シリアはオスマン帝国の支配下に入り、大航海時代の到来によって地中海交易はかつての勢いを失った。二十世紀、アラビア、シリアの諸族はトルコからの独立を目指して戦ったが、第一次大戦後英仏に分断されて委任統治下におかれ、第二次大戦後独立する一方、ユダヤ人がイスラエルを建国した、等々。

ヒッティ先生の本は読みやすくはないが、日本人になじみの薄いシリアの歴史を通して展望することが出来た。本棚の片隅でちよっとした宝物を見つけたようだ。